

ただけると幸いです。

コミュニケーション・

ヒストリーの試み

柿沼 陽平

本連続講演は、専修進級を控えた新入生の皆さんに歴史学の面白さを伝え、進級に際しての参考資料を提供することを一目的とする。そこで私は、率直に自らの経験談をお話しし、それを活用いただければと考え、まず自分の学歴（とくに留学歴）と研究歴を紹介し、その過程でどういう問題意識を抱き、それに回答しようとしたのかについて説明した。次にその蓄積から、「コミュニケーション・ヒストリー」という視点が生まれたことをのべた。最後に、その学問的意義を指摘した。

そもそも私は中学以来、中国古代史（とくに三国志の時代）に興味があったが、大学二年頃までは漫然とアルバイトやサークル活動に従事する日々を送っていた。だが

二〇〇二年二月～二〇〇三年三月（学部四年時）にイギリスのバーミンガム大学に留学し、状況が一変した。それは本来、英語と歴史学の基礎を学ぶことを目的としていたが、大学側の授業再編等の事情により、カルチュラルスタディーズと社会学を専攻することになった。その結果、私は歴史学以外の関連諸分野を広く学ぶことになった。またバーミンガム大学の講義は、筆者

の受講してきた日本の大学教育とは全く異なり、授業ごとに膨大な論文読解を課すもので、私はそこで英語論文の書き方を教わると同時に、むしろ歴史学以外の学問の重要性や面白さを学んだ。さらにそのときに世界各地のさまざまな人と出会い、多様な価値観のあり方を知ったことで、「大学卒業後すぐに就職することだけが人生ではない」と考えるところにも、より多くのことを学びたいと願うようになった。そこで帰国後に、大学入学以来興味を持っていた中国古代史関連の研究書を軸に、社会学・言語学・経済学・人類学等々の関連諸分野の研究書をも読み進めた。その際に私は徐々に、中国古代史関係の専門用語や社会背景を知るのみならず、その中に未解明の問題点を見出し、自ら探究するようになっていった。結果的にはこれが「勉強」から「研究」への第一歩であった。

その後私は、卒業論文の執筆中に次のような問題意識にとりつかれた。すなわち、我々が現在も使用している貨幣は一体いつどのように生まれたのか。我々は現在貨幣（経済の世の中を生き、時に貨幣に振り回されて生きているが、そのような世の中は一体いつどのようにして生まれたのか。この問題は、社会学・経済学・文化人類学等の関連諸分野とも関連するという意味で、私の興味をそそるものであった。またそれは、自分自身が現在置かれている「貨幣経済」という場をより深く理解するための探究でもあった。なぜ自分はいくも「お金」が必要なのか。「お金」のない生活はありえるのか。こういった問題を考えるために、私は中国古代における貨幣経済の展開

過程とその時代的特質を卒論の課題としたのである。これはまさに「自分探しの歴史学」とでもいうべきものであった。

爾来私は、上記の「研究」の面白さにとりつかれ、結局数年間にわたり、この問題を追いつけた。たとえば学部卒業論文では、殷周時代（紀元前十一世紀頃～紀元前三世紀頃）の寶貝（＝子安貝）を主題として取り上げた。寶貝とは熱帯・亜熱帯の海域に棲息する巻貝の一種で、一般に中国最古の「貨幣」とされている。しかし卒業論文では、殷周時代の史料を精読した結果、殷周寶貝が当時の上層階級の人びとのあいだで取り交わされる贈与交換品であり、むしろ「生命と再生のシンボル」として、貨幣とは別の存在意義を有していたことを検証した。また修士論文では、殷周時代に続く戦国秦漢時代における貨幣経済の展開過程とその時代的特質について検討した。さらに博士論文では、以上の研究成果を集成し、より広い視野のもとで中国古代貨幣経済史全体の時代的特質を論じた。その一成

果は、拙著『中国古代貨幣経済史研究』（汲古書院、二〇一一年）として刊行済である。

このように私は、これまで一貫して中国古代貨幣経済史について研究してきたが、それでは逆に、すべての人間社会は本当に貨幣を媒介とした人間同士のコミュニケーション（＝貨幣経済）によってのみ成り立っているのか。結論からいえば、そうではない。たとえば、貨幣経済の顕著に発展している現代においてさえ、「世の中はお金ではない」と考えている人は少なからず存在する。そして彼らは時に、贈与（御中元やクリスマスプレゼント等）に基づくコミュニケーションを行なっている。では、これらの貨幣や贈与といった各種各様のコミュニケーションは一体相互にどのような関係しているのか。そもそも各地域・時代の歴史が諸々のコミュニケーションによって成り立っている以上、歴史を解明する場合には、それら諸コミュニケーション全体を解明する必要がある。かくて私は現在、

中国古代史を例として、「コミュニケーション・ヒストリー」の構築を目指している。これは同時に、「よりよい未来＝よりよいコミュニケーション」のあり方を模索するための参考資料を提供するという現代的な目的も持っている。

ともあれ以上の個人的な経験談をふまえ、専修進級時の皆さんに向けて、私がとくに強調したいのは、①留学の重要性、②歴史学以外の関連諸科学をもふまえた広い視野に基づく歴史研究の重要性の二点である。これらが皆さんの専修進級および、その後の学生生活の一助となれば幸いである。

楔形文字に出会って

中山 八歩

一 いきなり、つまづいた！

現在、私は大学院の西洋史学専攻で古代メソポタミア史を研究しております。そもそも西洋史専修に進む気はありませんでし